

地域医療連携をさらに進めてまいります

日本医科大学千葉北総病院 副院長
医療安全管理部 部長
麻酔科・緩和ケア科 部長

金 徹
(きむ ちよる)

諸先生方におかれましては、益々御清祥のこととお喜び申し上げます。平素より当院への御支援御指導を賜り、心より感謝申し上げます。

千葉県では、本年度からの5年計画で千葉県保健医療計画が策定されました。この計画においては循環型地域医療連携システムの中に救急医療も含まれ、その内容は病院前救護からドクターヘリ/ドクターカーまで網羅されたものになっています。救命救急センターを擁する当院は、県の計画に沿った診療を行える体制を整えており、諸先生方の期待に応えられるよう努力しているところです。この計画で触れられているアドバンスト・ケア・プランニング、メディカルコントロール体制にも対応、協力しています。アドバンスト・ケア・プランニングは緩和ケアも関わることであり、当院では看護師、薬剤師、心理士、メディカルソーシャルワーカーなどの多職種で対応しております。

当院ではかねてより地域連携を進めてまいりましたが、地域連携を深めるべく様々な取り組みをしています。昨年より画像診断装置や血管治療装置を更新し、内科外来には日中の救急診療のスペースを確保しました。現時点で患者さんの受け入れが100%できているわけではありませんが、断らない医療を文字通り実践できるように、少しずつ日々改善を重ねています。もちろん3次救急は、従来通り救命救急センターが24時間対応しているところです。

諸先生方からのご紹介には迅速な対応を旨とし、速やかな診察を行い、早急な検査、手術が必要な場合には適切な対応を心掛けています。各診療科の判断で緊急手術が必要な場合には、麻酔科・手術室スタッフが応じています。

千葉県保険医療計画を念頭に、救急医療のみならず地域連携を深め、印旛2次保険医療圏ならびに近隣の地域医療に今後も貢献し、当院が安心して安全かつ速やかな医療を提供する病院であると先生方に認めていただけるようにこれからも尽力していく所存です。改めて先生方の御指導御鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



1 腎臓内科

高カリウム血症と慢性腎臓病のお話

部長 山田 剛久（やまだ たけひさ）

カリウム（K）は生野菜や果物に多く含まれており、慢性腎臓病（CKD）症例では尿からのK排泄が低下するため、血中濃度が上昇します。高K血症は致死性不整脈の原因となるため、CKDの患者さんには栄養指導の際に生野菜や果物の摂取量を減らすように話してきました。最近では状況が少し変化してきており、これらの食物はアルカリ性であるためCKD症例の酸塩基平衡障害の是正に寄与し、透析療法の開始時期を遅らせるという良い面が強調されるようになってきました。

さらに野菜に含まれる食物繊維は便秘症の改善という効果があるため、腸内細菌叢の改善によってCKD症例の予後改善につながる（腸腎連関）ことも解明されてきました。これらの知見から最近では腸からのK吸収阻害剤を処方すればCKD症例において以前程、生野菜や果物の摂取制限を厳しく指導することは無くなりました。これらの食物がお好きな患者さんにとっては福音であり、医

療者側も制限事項を口にする機会が一つ減ることでストレス緩和に役立っております。K吸収阻害剤は以前より数種類存在していたのですが、内服しづらく服用回数も多かったため、患者さんからの評判は決して良いものではありませんでした。最近になって服用回数が少なく飲み易い改良品が開発され、服薬アドヒアランスも以前より向上しているため、患者さんにも安心してK摂取制限の緩和をお伝えできるようになりました。

CKD症例に対する食事指導にはこの他にも塩分やたんぱく質摂取に関する制限事項が多く、このような複数の制限事項の中から一つでも減らせることは、患者さんのQOL向上の観点からも大きな意味があります。日進月歩の進歩を見せる医療の世界において、栄養指導や個別薬剤の飲み易さの改善という一見地味な事柄の組み合わせによって、比較的手間をかけずに患者さんのQOLを向上させることが出来る良い例であると考えています。

2 女性診療科・産科部長

千葉北総病院 女性診療科・産科の取り組み

部長 市川 雅男（いちかわ まさお）

地域に根差した診療の実践

千葉北総病院女性診療科・産科では、地域医療機関と連携し、専門性の高い診療を提供しています。特に婦人科診療では、子宮体がんを中心に腹腔鏡手術やロボット支援下手術（ダヴィンチ）を積極的に実施しており、婦人科では年間約50件のロボット支援下手術を行っています。これにより、患者さんの負担軽減と治療効果の向上を目指しています。

骨盤臓器脱治療への取り組み

当科では複数の専門外来を設けており、その一つが骨盤臓器脱外来です。この外来では、骨盤臓器脱治療の第一人者である市川雅男を中心に、メッシュ（人工補強材）を使った治療に伴う合併症リスクを最小限に抑えた手術を提供しています。また、術後のメッシュトラブルにも対応し、患者さんの生活の質を守るリカバリー手術も実施しています。

腹腔鏡技術向上のためのトレーニング

医師の技術向上を目的に、当科では「神の手チャレンジ」と呼ばれる腹腔鏡トレーニングを主催しています。このユニークなトレーニングでは、腹腔鏡器具を使って折り紙の

鶴を折る競技を通じ、手術器具の操作感覚や精密な動作を習得します。この取り組みは、医師たちの高度な手術技術の習得の一助となり、患者さんに提供する医療の質向上に繋がっています。この活動は多くのメディアにも取り上げられており、ご存知の方もいらっしゃるかもしれません。

最新の診断技術による子宮内膜症治療

子宮内膜症の専門外来では、日本医大考案の子宮内膜症診断法「NMS-E（Numerical Multi-Scoring System of Endometriosis）」という数値評価システムを用いた包括的な術前評価を行っています。最新の経腔超音波装置を活用し、患者さん一人ひとりの病態を正確に把握した上で、最適な手術や薬物治療を提供しています。この診断技術により、子宮内膜症の早期発見と適切な治療が可能となり、患者さんの生活の質向上に貢献しています。

紹介患者さんの受け入れについて

当科では、がん診療、お産、低侵襲手術、骨盤臓器脱治療、子宮内膜症診療における患者さんのご紹介をお待ちしております。地域医療機関の先生方と協力し、患者さんに寄り添った質の高い医療を提供するとともに、安心して受診いただける診療体制をさらに充実させてまいります。

3 小児科

食物アレルギー・アナフィラキシーについての小児科診療

部長 五十嵐 徹 (いがらし とおる)

1. 千葉北総病院小児科では、食物でアナフィラキシーまたはアレルギーを起こした乳児・児童・生徒の方々に、1泊2日でアレルギー負荷試験を行います。診断のための負荷検査と除去食対応を行っていた方への解除のための検査があります。学校の体育の時間で、運動後にアナフィラキシーを認めた方に、運動誘発負荷試験を行います。原因として、小麦等が疑われる場合は、小麦経口負荷後に運動誘発負荷試験を行います。
2. 6歳未満で皮膚科、内科、小児科開業の先生方で、自施設でアレルギーに関する採血が難しい場合は、当院で血液検査を行い、紹介元に結果報告書をお返しします。
3. エピペン®の指導を、学校薬剤師の先生方が御自身の担当する学校で行う場合の協力・支援を行います。当科で処方される院外処方箋を、患者様が通われている学校薬剤師の先生が勤務する薬局にお持ちいただき、実際に指導を行う機会を作ります。学校薬剤師の先生方との協力が不可欠と考えています。
4. 学校の養護教諭の先生方が、エピペンの指導が十分にされていないと考える児童に対して、処方医師とは別にエピペンの再指導を行っています。学校からエピペン指導の依頼を当院小児科に行い、小児科での指導内容については、エピペンの再指導を行った後に、学校生活管理指導表（アレルギー疾患用）（別紙様式 14）を記載し、保護者の方を通して学校へ提出します。
5. アトピー性皮膚炎の小児へのデュピクセントの注射に関して、小児科外来で導入、処方を行います。6歳未満で、皮膚科、内科、小児科開業の先生方で、自施設でデュピクセントの処方が難しい場合は、当院小児科で処方を行います。紹介元の希望により、軟膏療法、内服療法は自院で継続し、当院ではデュピクセントの処方のみを継続します。
6. 以上、診療情報提供書または紹介状に依頼内容を明記し、小児科外来へご紹介ください。

4 皮膚科

アトピー性皮膚炎・乾癬の最新治療

講師 萩野 哲平 (はぎの てっぺい)

当科では、乾癬やアトピー性皮膚炎の患者さんに対して総合的な治療を積極的に行っており、中等症～重症の患者さんに最新の治療を提供しています。これらの疾患に関しては全国的にも患者さんが多く、当院は全国有数の施設として高い評価を受けています。

乾癬は皮膚の赤みとカサカサしたフケのような鱗屑（りんせつ）を生じる慢性炎症性皮膚疾患で、「かんせん」と読みますが、感染症ではなく、うつる病気ではありません。乾癬の発疹は頭のおでこから足先までの皮膚のどこにでも出現し、爪の変形や関節症状も合併します。

これまで乾癬の治療を諦めている患者さんが多くいらっしゃいましたが、ここ数年で治療法が進歩し、乾癬を引き起こすサイトカイン（TNF- α , IL-17, IL-23）を標的とする内服薬や注射（生物学的製剤）が保険適用となりました。当院では、これらの治療を積極的に行っています。注射と言うと毎日打たなければいけないというイメージが強いですが、2週間ごとや3ヶ月ごとの注射など、多くの種類の治療薬が開発され、患者さん一人一人のライフスタイルに合わせて相談しながら薬剤を選択しています。

またアトピー性皮膚炎の治療に関しては、数年前から4種類の生物学的製剤が登場しており、最近ではサイトカインからのシグナルをブロックする3種類やヌスキナーゼ（JAK）阻害薬も保険適用となりました。これらは内服薬であり、注射が苦手な方でも治療が可能です。また、アトピー性皮膚炎の患者さんに対して、生後半年から積極的に治療できるようになりました。

乾癬やアトピー性皮膚炎があるために、今まで見た目を気にして温泉に行けなかった患者さんやTシャツを着られなかった患者さん、かゆみが強く夜眠れなかった患者さんたちの悩みが解決し、今が人生で1番調子が良いと言われる方もおり、我々の診療のモチベーションにも繋がっています。

乾癬、アトピー性皮膚炎に限らず、皮膚の悩みがございましたら、お気軽に当科にご相談ください。



5 外科・消化器外科

日本医科大学千葉北総病院 外科・消化器外科 上部消化管チーム

講師 柿沼 大輔（かきぬま だいすけ）

上部消化管チームでは主に食道癌、胃癌の外科的治療を受け持っております。食道専門医の渡邊教授、内視鏡外科学会技術認定医（胃）の柿沼、ロボット支援下手術プロクターの南村講師が中心となり、全癌腫において緻密で低侵襲な手術を行っております。食道癌に対する外科的切除は操作範囲が胸腹部におよび非常に侵襲の大きな手術ですが、2022年より高難度なロボット支援下食道切除術を導入しこれまでに20例以上に施行。術後経過は非常に良好で、大きな術後合併症は現在経験しておりません。患者さんの満足度も高い手術が行えていると実感しております。

また、手術以外にも、化学療法、放射線療法の専門家も在籍し、最先端な集学的治療を当院のみで完結することが可能です。胃癌に対しても、2021年よりロボット支援下胃切除術を導入し、現在までに30例以上に施行い

たしました。腹腔鏡を含めた低侵襲手術の割合は約7割で、こちらも非常に良好な成績を得ております。もともと早期に近い胃癌に対しよく行われていた腹腔鏡手術ですが、ロボットが導入されたことによりかなりの進行胃癌に対しても同様の低侵襲手術を行うことができるようになりました。また、胃癌治療のもう一方の柱である化学療法も、このたび胃がん治療ガイドラインに追加された抗腫瘍薬ゾルベツキシマブをいち早く病院レジメンに追加し、適応患者さんに積極的に投与しております。

同じ疾患でも、患者さんの併存疾患、希望、家庭環境により治療方針は変わってきます。消化器内科、看護師、薬剤師、臨床工学士、ソーシャルワーカーと密に連携し、個々人にとって満足度の高い、ベストな治療選択を提示させていただきますので、何卒よろしくお願い申し上げます。



日本医科大学千葉北総病院 外科・消化器外科
上部消化管チーム



6 看護部

アドバンス・ケア・プランニング (ACP) における
看護部の取り組み

看護係長／がん看護専門看護師 小泉 はるか (こいずみ はるか)

ACPとは、「本人が家族等や医療者との繰り返される対話の中で、本人の価値観や大切にしたいことを明らかにし、それに基づいた生活や医療・ケアの内容を話し合い、最期まで自分らしく生きることを支える取組のこと」を指します。(https://www.jspm.ne.jp/files/suggestions/20191129.pdf 日本緩和医療学会)

がん診療連携拠点病院である当院では、消化器がんの患者さんとその家族を対象に、3年前から外来看護師によるACP面談を行っています。ACP面談を実施するにあたり、まず外来看護師を対象に、がん看護専門看護師による学習会を開き、準備を致しました。その後、院内全体の看護師を対象とした教育コース「がんとACP」をスタートしています。心不全や救急など、がん看護分野に留まらない多くの看護師の参加があり、「患者さんに寄り添った看護をしたい」「患者さんが望む生活を最期まで支援したい」という数多くの声が上がりました。しかし、一方で「関わり方がわからない」と現場で悩んでいる看護師の姿も見えてきました。

そこで、看護部教育委員会と協議し、看護部中央教育

として「ACP実践者養成コース」を新たに立ちあげました。ACPを必要としているのは「がん分野」だけではありません。このコースの特徴は、がんに限らず、心不全やクリティカル分野も対象としていることです。講師もがん看護専門看護師やがん系の認定看護師だけではなく、老人看護専門看護師や慢性心不全看護認定看護師、クリティカルケア認定看護師など、院内のスペシャリストが集結しました。また、ACPの実践では、患者さんに寄り添う態度と、思いをお聴きする技術が欠かせないことから、半日をロールプレイの時間にあて、基本的なコミュニケーションスキルを振り返り、ステップアップとしてコミュニケーション技法の「NURSE」を習得します。「NURSE」とは、がんの様々な病期において、心の揺れ、心理的苦痛を抱える患者さんの感情に焦点をあて、患者さん自身が自らの感情に気付き対処していけるよう支援する技法です。

「ACP実践者養成コース」は2024年11月に無事第1回を終えることができました。今後も、患者さんとその家族の「生きる」を少しでも支援できるよう、看護部全体で取り組んでまいります。



地域連携医療機関のご紹介

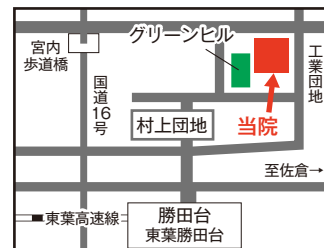
vol.17

日本医科大学千葉北総病院では、地域の医療機関との相互連携を一層強固にし、医療を必要とする患者さんのニーズに応え、適切で切れ目のない医療提供の実現を目指しています。このコーナーでは、当院の連携登録医としてご協力いただいている先生方を紹介してまいります。

医療法人社団 恵仁会 セントマーガレット病院 院長 朝戸健夫先生

診療科目 ▶ 内科、循環器内科、呼吸器内科、神経内科、腎臓内科（人工透析）、外科・消化器外科
 整形外科、脳神経外科、血管外科、形成外科、眼科、皮膚科、泌尿器科、婦人科
 リハビリテーション科、麻酔科、放射線科、消化器内科、救急科

診療受付時間 ▶ 平 日 午前：8：30～11：30（診療 9：00～）
 午後：13：00～16：30（診療 13：30～）
 土曜日 午前：8：30～11：30（診療 9：00～）
 午後：13：30～16：30（診療 14：00～）
 ＊診療科目により、異なります。



住所：〒276-0022 千葉県八千代市上高野450
 TEL：047-485-5111(代表) FAX：047-484-1119
 URL：http://www.st-marguerite.or.jp/

1. 貴院の特徴を教えてください。

当院は創設時から「医療と福祉の連携」という理念のもとに、地域に根ざし愛され頼りにされる病院を目指し、今年で38周年を迎えました。当初より患者さんが癒される空間をつくりたいとの想いがあり、建物の外観や英国式の沈床式庭園、院内のロビー天井に描かれた空と気球の絵や患者さんが描いた絵を飾るなど、和やかな雰囲気空間づくりをしています。患者さんにとってはご自分の絵を皆さんに見てもらおうことが、張り合いにもなっているようです。

病院は治療の時だけ患者さんを診るのではなく、より身近な存在として地域の方々の健康な心と身体を支える役割もあると考えています。開院当初よりバザーやボランティアによるコンサート、クリスマスには付属の保育室ピーターハウスの子供達の聖歌隊や劇など、季節にあったイベントの他、地域の公民館などに医師や医療職が出向いて行う健康講話、音楽療法士による歌声喫茶、春と秋の旅行会などを行ってきました。これらの活動は、地域の方々、患者さん、そのご家族に病の心配だけでなく、楽しい思いができる場所であってほしいと願っているためです。

病院以外の事業では、居宅介護支援事業所、通所リハビリテーション、大和田地域包括支援センター、訪問看護ステーション。2024年4月には、在宅診療中心のクリニックを開院しました。関連法人の社会福祉法人（特別養護老人ホーム グリーンヒル）と共に地域包括ケアシステムの機能をすべて網羅し、地域の方々に心と身体の「安心」を提供できる体制を目指し活動しています。

2. 総合病院と大学病院で診療の違いはありますか？

当院は、地域の幅広いニーズ、地域住民の暮らしに寄り添った総合的な医療を提供しています。より専門的で高度な医療が必要な場面では、大学病院に診療を依頼し、相互の機能分化により地域の医療を守ることができていると思います。

3. 地域医療連携についてはどのようにお考えですか？

大学病院や近隣の急性期病院・クリニック（在宅医療を提供している診療所等を含む）との連携を密に、病診・病病連携を積極的に行っています。ケアミックス病院（一般・療養病棟）として、クリニックからの紹介には積極的に応需し、高度急性期医療を必要としている患者さんの場合は、大学病院へ紹介、急性期治療が終了したら逆紹介をいただき、当院でフォローアップが取れる体制を整えています。

4. 今後の千葉北総病院に期待することはありますか？

これまでもスムーズな医療連携をしていただき、とても感謝しております。現在、千葉北総病院と当院を結ぶシャトルバスもあり、当院の患者さんに限らず八千代市民が千葉北総病院を受診する際にご利用いただけるよう八千代市医師会を通してご案内しております。引き続き、高度急性期医療や緊急手術を要する症例について、ご対応いただけますと幸いです。

5. その他何かありましたらお願いします。

患者さんには病気に対して前向きな気持ちで向き合ってほしいと思います。私自身、医師として長年患者さんを診てきましたが、前向きな患者さんのほうが良い結果が出ることが多い気がします。

私たち医師や看護師も、患者さんが前向きな気持ちになれるようにサポートしてまいります。セントマーガレット病院の行動理念「真心と、手のぬくもりと微笑みを…」を心に、これからも職員一同、努力をしております。

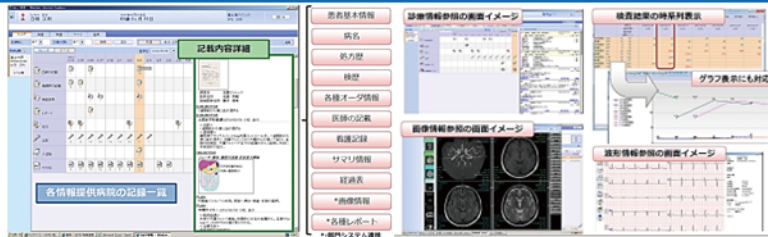


外観



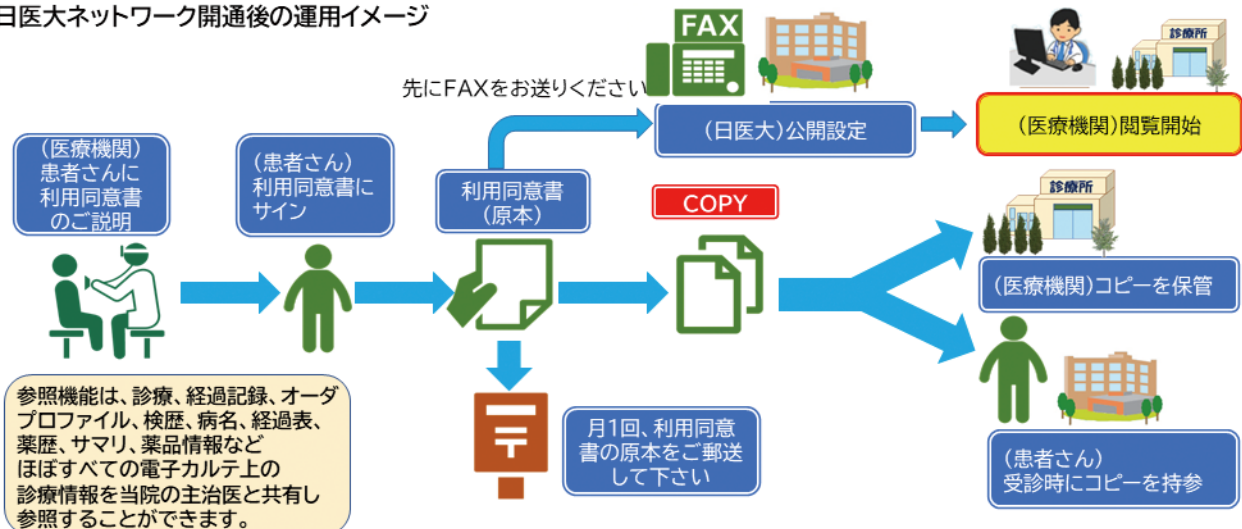
内観

当院では、地域連携システム(日医大ネットワーク)より 診療所や病院から直接病院の電子カルテを参照頂けます。



連携いただく施設には、一般のインターネットアクセスの可能なパソコン環境(Windows)があれば、特殊な装置を導入することなく地域連携システムに接続でき当院にご紹介いただいた患者さんの情報をほぼリアルタイムに共有できます。ネットワークの開通には当院のスタッフがお伺いし設定致しますので、どうぞお気軽にお声がけください。

日医大ネットワーク開通後の運用イメージ



日本医科大学千葉北総病院の理念

I 日本医科大学の教育理念と学是

教育理念：愛と研究心を有する質の高い医師と医学者の育成

学 是：克己殉公

(私心を捨てて、医療と社会に貢献する)

II 病院の理念

患者さんの立場に立った、安全で良質な医療の実践と人間性豊かな良き医療人の育成

III 病院の基本方針

1. 患者さんの権利を尊重します。
2. 患者さん中心の医療を実践します。
3. 患者さんの安全に最善の努力を払います。
4. 救急医療・高度先進医療を提供する指導的病院としての役割を担います。
5. 地域の保健・医療・福祉に貢献するため、基幹病院としての役割を担います。
6. 全ての人のために健康情報発信基地を目指します。
7. 心ある優れた医療従事者を育成します。
8. 先進的な臨床医学研究を推進します。

患者さんの権利

1. 人間として尊厳のある安全で良質な医療を受けることができます。
2. ご自身の判断に必要なとなる医学的な説明を十分に受けることができます。
3. 医療の選択はご自身で決定することができます。
4. ご自身の診療に関わる情報を得ることができます。
5. 他の医療機関を受診することができます。(セカンドオピニオン)
6. 個人情報やプライバシーは厳守されます。
7. 児童(18歳未満の全てのもの)は、上記6項目に関し成人と同じ権利を有します。(こどもの権利憲章を参照)

患者さんの責務とお願い

1. ご自身の病状や既往症について、詳しく担当医師にお話しください。
2. 医師の説明が理解できない場合は、納得できるまでお聞きください。
3. 他の患者さんの迷惑にならないよう、院内のルールはお守りください。
4. 医療従事者と共同して診療に積極的に取り組んでください。
5. 当院は医療者育成の使命を担っている大学病院であることをご理解の上、診療の可否を決定してください。
6. 医療行為は本質的に不確実な部分があります。安全な医療のため最大限の努力を払っておりますが、患者さんの期待にそぐわぬ結果を生じる可能性があることをご理解ください。

催し一覧

2025年1月～3月

2/26(水)
19:00～20:00

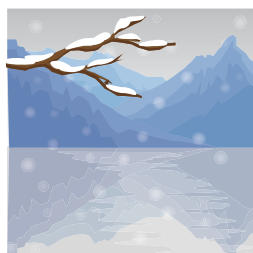
地域かかりつけ医との症例検討会

- 場 所 zoom オンライン
- 演 題 アミロイドPET陽性患者と陰性患者について
- 演 者 みつば脳神経クリニック 院長 大木 剛先生
千葉白井病院 脳神経外科 大村 朋子先生
- 問合せ先 認知症疾患医療センター事務局 TEL：0476-99-0413
- 申込み先 <https://forms.gle/LaKDKC6MKRLe8ddx6>

3/22(土)
13:00～14:30

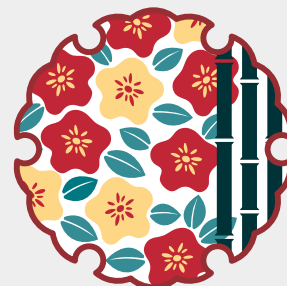
認知症治療 市民公開講座

- 場 所 大会議室
- 演 題 教えて先生！認知症の病気と治療のこと
- 演 者 日本医科大学千葉北総病院 メンタルヘルス科 部長 下田 健吾
日本医科大学千葉北総病院 脳神経内科 部長 山崎 峰雄
- 問合せ先 認知症疾患医療センター事務局 TEL：0476-99-0413
- 申込み先 <https://forms.gle/k3zoZCUzbUzvxHg6A>



編集後記

皆様あけましておめでとうございます。インフルエンザの猛威が吹き荒れる中、お忙しい日々をお過ごしのことと拝察申し上げます。当院でも外来のみならず、入院患者さんの多くでインフルエンザ感染が認められ、ベットコントロールに難渋している毎日です。ご迷惑をお掛けすることもございますが、患者さんの紹介や転院など、何かございましたら医療連携室までご連絡いただけますと幸いです。本年もよろしくお願い申し上げます。（広報委員会 岡島史宜）



本広報誌についてご質問あるいはご意見のある方は下記までご連絡下さい。

日本医科大学千葉北総病院 医療連携支援センター
〒270-1694 千葉県印西市鎌刈 1715
電 話 0476-99-1810 / FAX 0476-99-1991
e-mail:hokusou-renkei@nms.ac.jp

編 集：日本医科大学千葉北総病院
広報委員会、医療連携支援センター
印 刷：伊豆アート印刷株式会社
発 行：2025年1月（季刊誌）